

Title	ストーリーとしての現実世界 : A. マッキンタイア『美德なき時代』にみる物語としての自己と生
Author(s)	佐川, 祥予
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2023, 27, p. 11-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90840
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ストーリーとしての現実世界

— A. マッキンタイア『美德なき時代』にみる物語としての自己と生 —

佐川 祥子*

要 旨

本稿は、人間存在の観点から、ナラティブの性質について検討することを目的としている。ナラティブに関しては、研究者によって様々な立場や解釈がなされ、アプローチも多様であるが、本稿では、ナラティブ研究の核となるようなナラティブの本質に関わる議論を提示したい。まず始めに、個人化社会におけるナラティブの役割について、Z. バウマンを参照しながら論じる。次に、今日、学術領域や日常生活において重要な位置を占めているナラティブについて、その本質は何かを、『美德なき時代』(A. マッキンタイア, 1981/2021) を手掛かりに検討していく。その検討を踏まえ、最後に、今後のナラティブ研究に活かせる視点を抽出していく。

【キーワード】 ナラティブ、自己、生、善、共同体

1 はじめに

日本語教育において、ナラティブを用いた教室実践は目新しいものではなく、研究報告においてもナラティブやライフストーリーといったキーワードを多く見かける。しかしながら、言語教育のためのナラティブ研究の理論的基盤づくりが十分に行われているかどうかは疑問である。例えば、人文社会科学における思想潮流を踏まえながらナラティブをどのようなものとして位置づけるのか、あるいは、教育という現場でなぜナラティブを取り入れるのか、といった基本的な事項に関する議論を行う土壌が整っていない状況がある。

本稿は、人間存在の観点から、ナラティブの性質について検討することを目的としている。ナラティブに関しては、研究者によって様々な立場や解釈がなされ、アプローチも多様であるが、本稿では、ナラティブ研究の核となるナラティブの本質に関わる議論を提示したい。言語教育におけるナラティブ研究のあり方について一石を投じ、今後の活発な理論検討が行われることを企図するものである。

ナラティブ・ターン（物語的転回）は、ナラティブに関心を置いた研究が一つの潮流を形成していったことを示すものである。例えば、質的研究におけるナラティブを用いたエスノグラフィーの登場や、*On Narrative* (Mitchell, 1981)¹⁾の出版などは、ナラティブ研究への関心の高まりを示すものである。「ナラティブ」という用語は学術用語であり、日常的な表現で言えば、ストーリー／物語／語りのことである。本稿ではナラティブを、ストーリー／物語／語りと同義のものとして用いる。

ストーリーを語るという行為は、具体的に言えば、諸々の行為を時間軸に沿って配置しながら、意味を紡ぎ出していくというものである。ナラティブ研究のアプローチは、大まかに2つに分けることができる。表現形式に着目するもの（語られたもの）と、意味付けをして現実を生み出す機能に着目するもの（語る行為）である。本稿は、後者に注目している。

私たちの日々の社会生活においても、ナラティブの重要性は高まる一方である。以下、Z. バウマン (2001, 2008) を参照しながら述べる。現在の私たちは、バウマンが述べているように「個人化」²⁾した社

* 静岡大学国際連携推進機構助教

会を生きている。バウマンは個人化の本質を、所与とされたアイデンティティが、獲得されるものへと変化したという点にあると述べている。アイデンティティは、グローバル化した現代で消えつつある「コミュニティ」の代替物として求められるようになったものであり、それゆえ、安心できる居場所としての役割を担う。ところが、個人の利益追求を行った個人化社会においては、他者との絆は途切れ、不安定な自己を生み出しているため、アイデンティティ構築の作業は容易ではない³⁾。バウマンは、人生の物語を語ることは人生に意味や目的を与える活動であるが、同時に、大きな賭けでもあると言う。というのは、個人化社会では、個人は自身の境遇に責任を負わされているので、そのような基準の下で、自己を評価してしまう可能性があるからである。社会の様々な諸要因を切り離して、あるいは、人生というゲームが仕組まれたものではないかと疑うこともなく人生の良し悪しを決めてしまうことは、硬直した生を生み出してしまう。バウマンは、社会学の使命は、現実の描き方が多様であることを示し、語りの持つ様々な可能性が排除・剥奪されないようにすることであると述べている。

上記のバウマンの議論では、現代社会における、ナラティブとアイデンティティの密接な関係、そして、ナラティブの持つ可変性と柔軟性が指摘されている。

2 生としてのナラティブ — 『美德なき時代』から

2-1 徳に関する3つの段階

今日、学術領域や日常生活において重要な位置を占めているナラティブであるが、その本質は何かを考えてみたい。言い換えれば、私たちは、なぜナラティブを必要とするのか、という問いに向き合うということである。ナラティブをどのように捉えるのかによって、研究・実践のアプローチも変わってくるため、このような基本事項の検討は常に継続して行われるべきであろう。

この点について、道徳哲学の領域で活躍したA. マッキンタイアの『美德なき時代』を参照したい。同書で、マッキンタイアは、諸徳をめぐる議論の中で、物語として自己を描くことの重要性を指摘しており、人間の生とナラティブの根源的な繋がりを示してい

る。人間は「物語を語る動物 (story-telling animal)」であるというテーゼはよく知られているが、そこでの議論を改めて検討してみると、今後のナラティブ研究をより豊かにしていくための様々な視点 — 例えば、対話、他者性、協働性、相互行為等 — が含まれているのである。

徳とは何か。この点について、マッキンタイアは、次の3つの段階を経たものが「徳 (virtue)」として認められるという。「実践に内的な諸善 (goods internal to a practice)」であること、また、一人の人間の人生全体の善でもあること、さらに、人間存在にとっても善であること、これら3つの条件を経たものが徳である。つまり、まず、個々の実践が諸善をもたらし、次に、その諸善がその人の人生の目的を生み出し、そして、個々人の人生にとっての善がその人の属する共同体・社会と重なり合う、といった一連のプロセスが求められるということである。各段階ではそれぞれ、「実践 (practice)」、「一人の人間の生の物語的秩序 (narrative order of a single human life)」、道徳の伝統に関するテーマがある。もちろん、今日の個人化した社会においては、諸徳の概念の変化や「実践に内的な諸善」を捉えることの難しさはあるが、ナラティブ研究を行う上での重要な視点も多く、改めて同書を検討することには意義があると考ええる。

2-2 「実践に内的な諸善」

マッキンタイアによれば、人は「善 (a good)」や「善そのもの (the good)」を目指して生きており、その過程で、様々な「実践」を行っているという。あらゆる個々の「実践」もまた、何らかの善を目指したものである。「実践」というのは、「首尾一貫した複雑な形態の、社会的に確立された協力的な人間活動」(p.218 / 邦訳p.230) のことで、規則に則りながら、卓越した能力の発揮が求められるようなものを指す。例えば、スポーツやチェスの試合、建築、農業経営、その他、自然科学や人文科学、芸術における活動も含まれる。これらの日々の実践一つひとつには、個々の善があるという。マッキンタイアは、2種類の善を示している。一つは、実践に付属している外的な善のことで、例えば、名声、富、社会的地位、権力、といった個人の財産や所有物になるものである。もう一つは、その実践を通じてのみ得られる内的な善のことで、例えば、何かの分野で有能

さを発揮することや、新しい技法を生み出すことが挙げられる。内的な善の特徴として、達成することが、その実践を行う共同体にとって善になるということがある。とりわけ重要なのは、後者の「実践に内的な諸善」であり、これを達成するために必要なものが、人間の性質としての徳であると述べている。徳とは、正義、勇気、正直といったものであり、他者との関係構築に関わるものである。こうした徳は、諸々の実践における内的な善を支えるだけでなく、私たちの人生をも支えているのだ。この点について、次に見てみよう。

2-3 物語としての自己

マッキンタイアは、様々な個々の実践における善という段階から、次に、個人の人生全体における善、自分にとっての善、というように、徳に関する議論を展開する。諸徳は、私たちの個人生活を維持するものでもある。

私たちは、自己の存在を成立させるために、統一した生を求めている。ここで鍵となるのが、物語である。マッキンタイアによれば、個々の人の生の統一性は、その人の持つ人生の物語の統一性に拠っているという。つまり、人生の物語の描き方は、その人の人生をどのように捉えるかということと連動しているのである。私たちは、「人間にとっての善き生 (the good life for man)」を求めて、「物語的な探究 (narrative quest)」を進める。

物語は、予測不可能性と目的論的性格の双方を持っているという。

実際、何らかの未来のイメージによって形成されていない現在というものは存在しない。そして未来のイメージとは常に、テロスの — あるいは多様な諸目的や諸目標の — 形で現前していて、それに向かって現在の時点で私たちは進んでいるか進み損ねているかいずれかなのだ。(…中略…) 私たちは何が次に起こるか知らないが、にもかかわらず私たちの人生は、未来に向けて投影されるある種の形をもっている。(p.250 / 邦訳 p.264)

不確実な状況の中で、未来に向けて私たちが歩むことができるのは、「人間にとっての善き生」を目指しているということがあるからだろう。目指していく方向があることで、不安定な現在においても、未

来をイメージすることができるのである。

マッキンタイアは、物語的な自己は、人格の同一性に関して、次のような特徴を持っていると述べている。一つは、誕生から死までの時間の流れを生きる歴史を持った主体であるという点である。それは、自己の人生の過去の行為や出来事について、「申し開きができる (accountable)」ということであり、人格の同一性を示すような理解可能な物語を開示できるということを示している。もう一つは、他者に対しても、申し開きを求めることができるという点である。個々人は自分の物語の主役であると同時に、他者の物語の登場人物でもある。互いに相手の申し開きを求めることで、互いの思惑を知ることができ、物語を構成していくことができる。物語的な自己における同一性の議論においては、個々人が申し開きを行う責任を担っていると言える。

2-4 生きられている物語

私たちの自己の物語は、「誕生－生－死を〈物語の始め－中間－終わり〉として連結させる」(p.239 / 邦訳 p.252) ものである。

私たちは、ある人の同一の行動を様々な表現することができる。例えば、「彼は何をしているのか」の問いに対しては、「文章を書いている」「著書を完成させている」「テニユアを取ろうとしている」といった答えが可能である。どのような答えを選ぶのかは、個別具体的な歴史的背景を有する「舞台 (setting)」において、行為者がどのような意図をもってその行為をしていたのかということと関係している。長期的な意図を捉えれば、そこに含まれる短期的な意図も理解可能となる。例えば、テニユアの獲得を目指すという将来的な長期的意図があるのであれば、文章を書いているという現在の状況も理解できるようになるのである。

ここで重要となる概念は「理解可能性 (intelligibility)」である。

ある出来事 (occurrence) を行為として同定するとは、典型的な事例にあつては、その出来事を、人間の行為者の意図、動機、情念、目的から理解可能な仕方で見られるものとして見ることができるようタイプの記述のもとで同定することなのである (p.243 / 邦訳 p.256)

ある人の行為の理解可能性を支えているのは脈絡である。その行為がなぜ行われたのか、ということを行為者に求めれば申し開きができるはずであり、他者はそのようなものとして行為を捉えている。もしも、それができなければ、人々の間には戸惑いが生じ、他者を理解できなくなるのである。つまり、行為を脈絡から切り離すということとはできないということを示している。

このように、様々な行為は物語として捉えうるものであるが、この点について、さらに見ていきたい。

マッキンタイアは、日々の会話や相互行為も、物語であると述べている。

私たちは、文学的叙述に対してと同じく、会話をいろいろなジャンルに割り当てる。たしかに会話はきわめて短いものではあっても劇的作品なのであり、その参加者たちは俳優であるだけでなく、その共同脚本家でもある。そうして彼らは意見を同じくしたり異にしたりして、自分たちの作品の様式を決めていくのだ。というのも、会話にはちょうど芝居と小説のようにいろいろなジャンルがあるというだけでなく、会話には文学作品と同じく、始めと中間と終わりがあるからである。(p.245 / 邦訳p.258)

例えば、「とりとめのない口論」「悲劇的な誤解」「互いを支配しようとする闘争」「些細な噂話のやりとり」等のような会話のジャンルがあり、そうした会話の劇を私たちは生み出し、演じている。話が始まり、山場を迎え、次第に収束していくといった流れがあるが、また、脱線や副筋 (subplots) も織り込まれるなど、複雑な構成の劇となる場合もある。一つひとつの発話は、劇という物語の進行に合わせ、物語上で行われているのである。

ところで、以上のことが会話について言えるならば、それはまた、必要な変更を加えれば、戦争、チェスの試合、求愛、哲学の演習、家族の夕食、ビジネスマンの契約交渉についても、つまり人間の相互行為 (human transaction) 一般についても言えるのである。というのは、会話とは広く理解すれば、人間の相互行為一般の形態をとるからである。(p.245 / 邦訳p.258)

私はこうして、特殊的には会話、一般的には人間の相互行為という両者を、演じられた物語 (enacted narratives) として提示しているのだ。物語というものは、歌手や著述家が順序をそれに付与するまでは語りの順序などもたなかった出来事を、詩人、劇作家、小説家が考えをめぐらすことから生まれてくるものではない。物語という形態は偽装でも装飾でもない。(p.245 / 邦訳p.259)

物語というと、その形式に着目するあまり、内容をひとまとまりにして伝えるものをイメージしがちである。しかし、マッキンタイアが述べているように、人の生を物語としてとらえるのであれば、様々な日常の行為や発話は、一連の人生の物語における行為と位置付けるということができるのである。さらに、会話がなされているのは、人々の相互行為過程においてであるから、そうした様々な相互行為も、物語であると言うことができる。

物語という形態が他者の行為を理解するのにふさわしいのは、私たちすべてが自分の人生で物語を生きているからであり、その生きている物語を基にして自分の人生を理解するからである。物語は、虚構の場合を除けば、語られる前に生きられているのだ。(p.246 / 邦訳p.259)

ここで示されていることは、私たちの人生は、それ自体が既に物語なのであって、物語化されることを待っている何かではない、ということである。現在、今進行中の物語のただなかに、私たちは存在している。つまり、人間の生は「何の秩序もないバラバラな諸行為」から成っているのではないということだ。もしも、秩序もなくバラバラな行為をしているのであれば、何らかの未来をイメージすることもできず、今ここで、どのように振舞えば良いのかもわからなくなってしまうだろう。物語というパースペクティブを持っていることが、安定した日々の生活の維持に繋がっている。

2-5 共同体の一部としての自己

最後に、マッキンタイアの徳に関する3つ目の段階に触れておこう。マッキンタイアは、個人が「人間にとっての善き生」を目指すという話から、さらに、共同体や伝統という文脈における徳についても

論じていく。

そもそも、「人間にとっての善き生」とは、時代や社会によって異なるので、個人だけで追求できるものではない。環境が、何が善き生なのかを規定している。また、私たちが生まれた時から担っている様々な社会における役割を考えてみても、そうした役割が、私たちが何を行うべきかを方向付けていることがわかる。善い人生か善くない人生か、成功した人生か失敗した人生か、といった判断の基準は、自己を取り囲む社会の環境の中にある。私たちは、家族・都市・民族等の共同体の一員であり、個々人の物語は、共同体の物語の中に埋め込まれているのである。つまり、自己は、共同体の伝統の担い手であり、歴史の一部でもあるのだ。

3 まとめにかえて

以上、マッキンタイアの『美徳なき時代』を見てきたが、その物語論のエッセンスをまとめ、今後のナラティブ研究への展望を述べたい。

まずは、ナラティブ・モードとの接点についてである。人生を物語として捉えるという視点は、ナラティブ・モード (Bruner, 1986 / 1998) による認識の在り方を具体化したものであると言える。ナラティブ・モードとは、パラディグマティック (論理科学的)・モードと並列して存在する私たちの2つの思考様式である。パラディグマティック・モードは、形式的で経験的な証明の仕方で真理を立証していく際の思考様式であり、抽象的で体系立てられたものを志向する。一方、ナラティブ・モードは、検証可能性を求めるものではなく、一定の筋をもって追真的に真実味を生み出していく際の思考様式であり、具体的な人の意図や行為を時間と空間の中で位置づけること、つまり、日常性を志向するものである。人は、行為者の意図を捉えたり、様々な行為を意味のある理解可能なものとして解釈したりするナラティブのスキルを持っており、子どものころから無意識にそうしたスキルを発達させていく。通常とそうでないものを見分け、自分にとって、納得のできる物語へと仕立てていくのである。ナラティブ・モードという生来的ともいえる認知のための様式について、その役割を、人間の生や道徳の観点から検討していくことで、ナラティブの機能に関する議論を新たな角度から行うことができるだろう。

次に、「実践に内的な諸善」についてである。これをそのまま現代の社会に取り入れていくことには難しさがあるものの、「実践」に関する議論は興味深いものがある。他者が介在する「実践」を通じ、個人が経験をj得て、その経験が共同体に還元されていく、といった視点は、共同体への参加・関わりという観点で、実践共同体 (Lave & Wenger, 1991 / 1993) を彷彿とさせる。共同体において、知識や熟練した技術というのは個人に属しているのではなく、共同体内で分散的に共有されている。個人と共同体の関わりや共同体自体の変容を考える際に、その背後にある私たちの意識や志向を合わせて論じていくことができる。と考える。

物語が、予測不可能性と目的論的性格という相反する2つの性質を有しているという点については、2つの語り方のスタイルとの関連を指摘できる。語るという行為には、2つの語り方があるとされている。一つは、秩序づけられた世界を目指す「定着した物語」であり、もう一つは、既存の物語を壊し変容させる「生成する物語」である (吉田, 2003)。「閉じられた語り」と「開かれた語り」とも呼ばれている (鳶野, 2003)。これらは、理念的なものではなく、このような語りを臨床現場で用いたものとして、「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティブ・ストーリー」がある (Epston & White, 1992 / 2014)。そもそも、このような2つの語り方のスタイルが要請される背景には、私たち人間が、秩序ある社会的世界を創り出し、確固たる現実を現前させ、また、与えられた現実世界を自らの内に取り込み社会化していくという、外在化・客体化・内化といった社会構成のプロセスを絶え間なく行っているということがある (バーガー, 2018、バーガー & ルックマン, 2003)。私たちの人生は、不安定であるし、安定しているとも言えるのである。物語するという行為の柔軟性は、私たちに、予測不可能な事態に対峙していくことを可能とし、また、異質なものを取り除き明確な目的を持って結末を見据えていくことをも可能とするのである。

また、会話や相互行為一般を物語として捉えるというアイデアは非常に示唆的である。言語教育におけるナラティブ研究の手法に、有益な観点を提供するだろう。物語としての体裁の有無が物語かどうかを決めるのではなく、物語というパースペクティブで行為を眺めることを提案しているのである。つ

まり、今ここで繰り上げられる日常の様々な行為・発話はどれも、物語という世界を制作する行為だということである。この点については、近年の、語りのプロセスの重視という文脈で新たな視点を与えてくれるであろうし、また、物語するという行為が内包している2つの領域である「Taleworld」と「Story-realm」(Young, 1987)の概念とも関係している部分である。

最後に、バフチンの対話原理と関連している点も指摘しておきたい。マッキンタイアは、物語的自己の歴史的な主体性に関して、その主体の申し開きに関する責任を論じていた。他者との相互の申し開き行為は、各々の人生物語の制作には欠かせない。互いを理解可能なものとしなければならないという要請が働いている。物語的自己というものは、自己の内側に閉じたものではなく、むしろ、外へ、他者へ開かれたものである。つまり、他者との対話が必要とされているのである。バフチンは、すべての発話には「宛名」があり、必ず誰かに向けられたものであること、また、発話それ自体にも作者がいるということを示している。私たちは能動的に応答しながら他者と向き合う。こうしたことは、私たちの人間存在を支えるものであり、また、そのようにする責任があると言えるだろう。さらに、マッキンタイアは、会話の様々なジャンルと会話の流れをつかむ能力について論じていたが、これは、バフチンの言うところの「ことばのジャンル」と密接に関連したテーマである。私たちは、発話の一端を聞くことで、その発話の流れを見据えて、結末さえも予測することができる。私たちは、発話者の意図や狙いを読み取り、適切なジャンルの選択を行うというメタ・コミュニケーションスキルを水面下で発動させているのである。だからこそ、能動的な応答が可能となるのである。ナラティブと対話の関係を検討していく上で、言葉のジャンルというのは有力な手掛かりとなるだろう。

注

- 1) 同書は、文学、歴史学、文化人類学、心理学、言語哲学等の様々な執筆者がかかわっており、ナラティブ研究が学際的性格を持つものであることがわかる。J.S.ブルーナー(1991)は同書がひとつのパラダイムシフトのきっかけとなったことを指摘している。
- 2) バウマン(2001)は、「私」が「公」を覆っている現代においては、個人と集団が結び付いて私的幸

と公的幸福が得られる場所、そして、共通の大義や公正な社会に向き合う市民としての能力を取り戻す場所として、公共広場(アゴラ)という発想が必要であると述べている。

- 3) 格闘する個人の孤独や苦しみを一時的に和らげてくれるものとして「かけ釘共同体(不安を引っ掛けるかけ釘の周りに集まった集団 peg communities)」や「クローク型共同体(劇場で舞台を共に鑑賞するが、公演後は興奮も冷め、クロークのコートを着て日常に戻っていく集団)」といったものがあるが、流動的で短命な共同体である。

参考文献

- Bakhtin, M.M., (Vološinov, V. N.) (1986). *Marxism and the Philosophy of Language*. Translated by Matejka, L. and Titunik, I. R., Harvard University Press. バフチン, M. M., 北岡誠司訳(1980)『言語と文化の記号論』新時代社。
- Bakhtin, M.M., (1986). *The problem of speech genres in Speech genres & other late essays*. Translated by McGee, V. W., University of Texas press, pp.60-102. バフチン, M.M., 佐々木寛訳(1988)「ことばのジャンル」新谷敬三郎他訳『ことば対話テキスト』新時代社, pp.113-189.
- バウマン, Z., 森田典正訳(2001)『リキッド・モダニティ』大月書店。
- バウマン, Z., 澤井敦他訳(2008)『個人化社会』青弓社。
- バーガー, P.L., 藪田稔訳(2018)『聖なる天蓋』筑摩書房。
- バーガー, P.L., ルックマン, T., 山口節郎訳(2003)『現実の社会的構成』新曜社。
- Bruner, J.S., (1986). *Actual Minds, Possible Worlds*. Cambridge, Harvard University Press. ブルーナー, J. S., 田中一彦訳(1998)『可能世界の心理』みすず書房。
- Bruner, J.S., (1990). *Acts of Meaning*. Cambridge, Harvard University Press. ブルーナー, J. S., 岡本夏木他訳(1999)『意味の復権—フォークサイコロジに向けて』ミネルヴァ書房。
- Bruner, J.S., (1991). The narrative construction of reality. *Critical Inquiry*, 18, pp.1-21.
- Epston, D., and White, M., (1992). A proposal for a Re-authoring Therapy: Rose's Revisioning of her Life and a Commentary. In *Therapy as Social Construction*. SAGE Publications Ltd, pp.96-115. エプストン, D., ホワイト, M., 野口裕二他訳(2014)「書きかえ療法—人生というストーリーの再著述」『ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践』遠見書房, pp.103-137.
- Lave, J., & Wenger, E., (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press. レイヴ, J., ウェンガー, E., 佐伯胖訳(1993)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書。

Mitchell, W. J. T., ed. (1981). *On Narrative*. University of Chicago Press.

MacIntyre, A., (1981). *After Virtue*. University of Notre-dame Press. マッキンタイア, A., 篠崎榮訳 (2021) 『美徳なき時代』みすず書房.

鳶野克己 (2003) 「生の冒険者としての語り—物語のもう一つの扉」矢野智司他編『物語の臨界—「物

語ること」の教育学』世織書房, pp.183-211.

Young, K.G., (1987). *Taleworlds and Storyrealms: The Phenomenology of Narrative*. Dordrecht, Martinus Nijhoff.

吉田敦彦 (2003) 「沈黙が語る言葉—出会いと対話と物語」矢野智司他編『物語の臨界—「物語ること」の教育学』世織書房, pp.213-247.

Abstract

Real worlds as story

— Self and Life as Narrative based on A.MacIntyre's *After Virtue* —

SAGAWA, Sachiyo

This paper aims to examine the nature of narratives from the perspective of human existence. There are various viewpoints and interpretations of narratives by researchers, and there are various approaches. In this paper, I would like to present a discussion on the essence of narratives, which is the core of narrative research. First, I discuss the role of narratives in the individualized society with reference to Z. Bauman. Next, I will examine what is the essence of narratives, which occupy an important position in academic fields and daily life today based on *After Virtue* (A. MacIntyre, 1981/2021). And finally, we will extract perspectives that can be used in future narrative research.